

# 第6章 中島飛行機の変遷と地域の発展

## 中島飛行機 東京工場は街の形成に大きく関わり航空機産業の礎を担った

「桃井原っぱ公園」は、かつて中島飛行機製作所東京工場が建設された地であり、国産第一号の航空機エンジン「寿」をはじめ、世界にその名を轟かせた零戦搭載の「栄」エンジンなどが設計、製造された。

将来の井荻村の発展のため大規模な土地区画整理事業を成し遂げた、村長内田秀五郎。

いち早く航空機時代の到来を見とおして、巨大企業中島飛行機を築き上げ、多くの名機を世に送り出した中島知久平。

2人の先見性と卓越したリーダーシップで実現した東京工場は、太平洋戦争に巻き込まれ、どのような顛末を迎えたのだろうか。

※中島飛行機製作所は、後に中島飛行機株式会社へ、東京工場は、後に荻窪製作所に改称するが、本章ではそれぞれ、中島飛行機、東京工場として記載しています。



### 中島飛行機東京工場の沿革

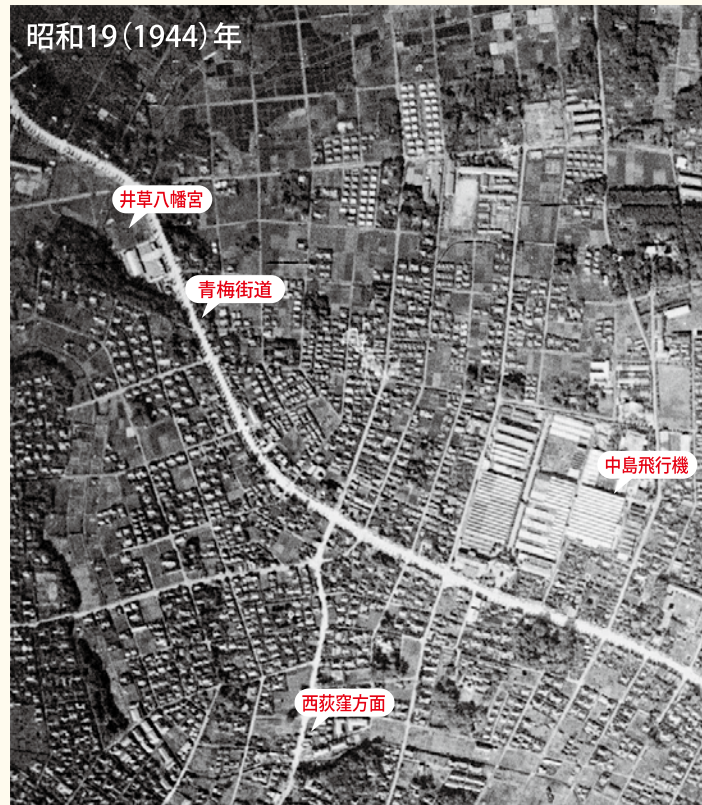
- 大正6(1917)年 海軍を退職した中島知久平は、群馬県太田町(現太田市)に飛行機研究所を設立
- 大正8(1919)年 中島飛行機製作所に商号変更
- 大正12(1923)年 ※ 関東大震災
- 大正14(1925)年 東京工場開設(現在の桃井原っぱ公園)
- 昭和5(1930)年 国産第一号エンジン「寿」を開発
- 昭和6(1931)年 中島飛行機(株)に商号変更
- 昭和7(1932)年 ※ 杉並区発足(井荻町、和田堀町、杉並町、高井戸町が合併)
- 昭和11(1936)年 エンジン「栄」を開発
- 昭和16(1941)年 エンジン「誉」を開発  
※太平洋戦争、開戦
- 昭和20(1945)年 4月中島飛行機は、第一軍需工場に移管。東京工場は、同工場第23製造廠となる  
※ 太平洋戦争、終戦  
8月終戦処理命令により、第一軍需工場は解散。中島飛行機は、民需産業転換を目指し定款を改定、富士産業(株)に商号変更
- 昭和21(1946)年 GHQ(連合国最高司令官総司令部)は、第2会社15社(工場)の設立による富士産業(株)の解体を指令
- 昭和25(1950)年 富士精密工業(株)(旧東京工場)を発足
- 昭和30(1955)年 ペンシルロケット初フライトに成功
- 昭和36(1961)年 プリンス自動車工業(株)に商号変更
- 昭和41(1966)年 日産自動車(株)と合併。同社荻窪工場開設
- 平成10(1998)年 日産自動車(株)荻窪工場は、群馬県富岡市に移転
- 平成23(2011)年 桃井原っぱ公園開園

終戦後の旧中島飛行機本館  
(写真提供:田中次郎さん)

写真:国土地理院撮影の航空写真(1941年撮影)



写真:国土地理院撮影の航空写真(1944年撮影)



### 中島飛行機 東京工場が 井荻村に開設

大正14(1925)年、青梅街道沿いの東京府豊多摩郡井荻村上井草(現・杉並区桃井三丁目)に、中島飛行機製作所東京工場(後の中島飛行機株式会社荻窪製作所)が、その姿を現した。当時の規模は、敷地3,800坪、建物550坪、従業員約80名。同工場の発展は著しく、翌年には敷地18,700坪(後に28,200坪に拡張)、建物3,800坪、工作機械190台、従業員200人、さらに昭和12(1937)年末には5,500名の従業員を抱える大工場に発展。

当時の井荻村は、さして見るべき工業はなく、最先端の技術で飛行機を製造する近代的な大工場の姿に周辺の子どもたちは驚きとともに憧れた。昭和2(1927)年、東京工場は、英国から技師2名を招聘し、その指導のもとに翌年ジュピター6型エンジンを完成。これを搭載した機体が多数生産された。このエンジンは、製造権の取得によるものであるが、東京工場のエンジン生産の母体となった。また、関係機器も順次国産化されるなどエンジン量産体制確立のスタートとなった。東京工場の技術者たちは、このライセンス生産時代に外国エンジン製造技術を積極的に習得し、次の国産化に備えた。そして、早くも昭和4(1930)年、東京工場の設計・現場が一体となって、国産第一号エンジンとなる「寿」の設計に着手した。

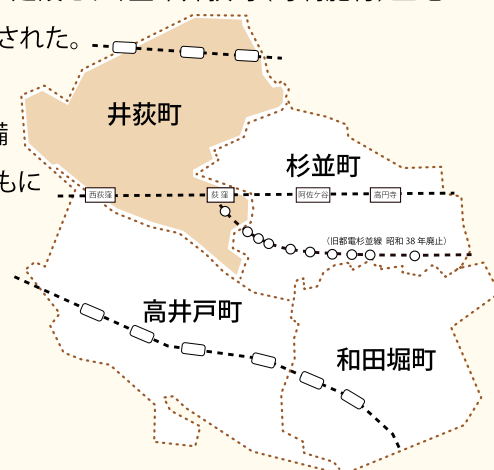
### 内田村長 と井荻村

大正9(1920)年当時の井荻村(明治22年、上井草村、下井草村、上荻窪村、下荻窪村が合併)の人口は4,369人、戸数は

719戸で、現在の荻窪駅と西荻駅間周辺から上井草方面に向かう広大な村内に家が点在し、武蔵野の景観を偲ばせるのどかな農村であった。内田秀五郎村長は、電灯、道路整備、鉄道駅の開設等に熱心に取り組んでいたが、大正12(1923)年の関東大震災によって移住者が急増。内田村長は、この大震災をひとつの転機として、将来の村の発展にとって重要な生活・産業基盤となる全村対象の土地区画整理事業を英断した。

一方、中島飛行機は、群馬県の太田工場のほか、エンジン製造工場の建設を考えていたが、この大震災が契機となり、東京の城西地区に候補地を物色した結果、井荻村に工場建設地を求めた。工場誘致は、村の財政面や発展に寄与することなどから歓迎すべきことだが、環境悪化もそれにとまなう課題であった。そこで、内田村長は、中島知久平に対して村の「公害防止条件」を要求、承諾を得て、井荻村村議会は、大正13(1924)年工場誘致を可決し、中島飛行機東京工場の建設が正式決定に至った。内田村長の先見性と卓越した指導力のもと、大正14(1925)年東京工場が建設され、翌年井荻町(町制施行)土地区画整理事業が着工された。

ここに、井荻村は、生活・産業基盤の整備を図り、東京工場とともにさらなる村の発展を目指した。



## 地域への還元

東京工場の開設は、優秀な人材を確保することも目的の一つであったが、井荻町の農村の子弟を優先採用することで地元への還元も図った。時代の最先端を行く航空機エンジンを製造する東京工場は、給与等の待遇が良く就職先としての人気も高かった。当時一流企業の大卒初任給が60円の時代に中島飛行機東京工場の大卒技術者の月給は85円、職人見習(高等小学校卒)で月給10円から15円、職人になると月給もあったが請負制で300円ぐらい月収を得る人もいたそうだ。

東京工場の従業員は、開設当時の80名から昭和12(1937)年には5,500名に達した。東京工場は、地元優先による雇用の創出や従業員宿舍、貸家の増加、地域商店での購買や取引が増えるなど、町の発展に大きく貢献した。東京工場の周辺には、郵便局、信用組合(後の信用金庫)の開設に加え、航空機関学校などの教育機関も開校され、地域の市街化の促進に大きな役割を果たした。

## 太平洋戦争と中島飛行機

中島飛行機はもとより日本の航空機メーカーは、不幸にして戦争の渦に巻き込まれていった。飛行機本来の目的である旅客や貨物の航空輸送ではなく、国の要請による軍用機の開発と増産にこたえて工場の拡張、新設を行うなど作業の合理化、生産に取り組むことになった。このことは、結果的に日本の航空技術を飛躍的に発展させたことも事実である。

開戦を知った東京工場の技術者たちは、愕然かつ暗たんとした。東京工場のエンジン「栄」などの月産台数は、わずかにすぎなかった。期待されていたエンジン「誉」も試作段階であり、また協力工業の技術水準の低さなどから、勝利することは難しいことがわかってきたからである。しかも、東京工場のエンジンの技術・生産能力については、開戦前に米国航空メーカーの技師が生産指導にきており、熟知していた。

しかし、そうした状況のもと、東京工場の技術者たちは、死力をつくして技術開発を行い、世界レベルの航空エンジンを生み出していった。東京工場の生み出した国産第一号エンジン「寿」は、ときに「百姓エンジン」と呼ばれ、「地味ではあるが、信頼の持てる発動機」といわれていたという。この「寿」の評価は、中島飛行機が航空機メーカーの中で確固たる地位を築く出発

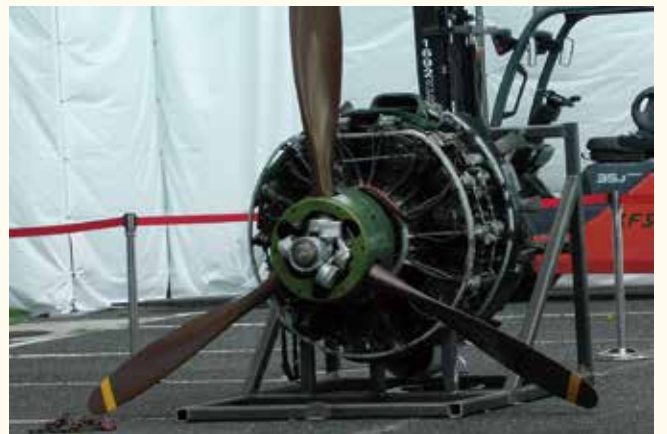


栄21型エンジン補器に東京製作所名の銘板があった

点となり、その後開発された「栄」は、零式艦上戦闘機、一式戦闘機「隼」などに搭載され、大戦当初は、米英の戦闘機を圧倒することとなる。

終戦直前の昭和20(1945)年4月に軍需工廠官制が公布され、中島飛行機は第一軍需工廠として国営化された。

当時中学生だった佐藤精知夫さんは、「学徒動員により中島飛行機で勤労しました。給料ももらったのでアルバイトに行っている感覚でした。作業内容は清掃と梱包が中心でした。まだ子ども(中学生)だったので、部品の組み立てや製造などには関わりませんでした。女子学生はいませんでした」と中学生以上の子どもの働き方を伝えてくれた。



現存の零戦から分離された栄21型エンジン

「栄」系エンジンは、その優秀性から、総生産台数は約3万基に達した。次に世界に例のない軽量、小型、強馬力の「誉」工



佐藤精知夫さん

ンジンが開発され、四式戦闘機「疾風」、局地戦闘機「紫電」などに搭載されたが、良質な燃料の不足、熟練工不足による工作精度低下などで本来の性能を十分に発揮することなく終戦をむかえることとなる。

中島飛行機は、終戦まで機体25,935機、エンジン46,726基を生産。最盛期に日本航空機生産に占めるシェアは、三菱重工業(株)とともに最大の生産量を占め、航空業界を二分し、就業人員25万名を擁した巨大企業であった。東京工場においては、生産単価の特段に高い航空機エンジンを製造したことにより、杉並区(昭和7年区制施行)生産額のうち、工業生産額が9割強を占めるといふ圧倒的な実績を残した。中島飛行機は、多くの名機を世に送り出したが、終戦と同時に創立後30年、東京工場は開設後20年の歴史に幕を下ろすこととなった。

### 技術者の活躍と技術の継承

昭和20(1945)年8月終戦、兵器生産の停止等と解散の終戦処理命令。中島飛行機は民需産業転換を目指し、富士産業株式会社に変更する。東京工場は、その後富士精密工業、プリンス自動車工業と業態・社名を変更し、昭和41(1966)年、日産自動車(株)と合併し、この地は同社の荻窪工場となる。

技術者たちは、航空エンジン開発の道を絶たれても、飛行機にかけた情熱、旺盛なチャレンジ精神を失うことはなかった。中島飛行機時代に培われた高度な技術は、自動車産業をはじめ、宇宙開発に継承され技術立国日本の礎の一つとなった。

富士精密工業時代には、東京大学生産技術研究所の指導を受けて、ペンシルロケットの初飛行に成功。ロケットの技術は脈々と次世代に継承され、平成15(2003)年M-Vロケットで打ち上げられた小惑星探査機「はやぶさ」が、小惑星での任務を終え7年目に帰還した奇跡的な出来事は、多くの人々に感動を与え記憶に残っていることであろう。

### 桃井原っぱ公園と荻窪病院

平成10(1998)年、日産自動車(株)は移転することになり、跡地は売却されることになった。日産自動車(株)は、公共性の高い跡地利用を望み、これに対し杉並区は「防災公園街区整備事業」を活用して防災公園と市街地を一体的に整備するために、「UR都市機構」に事業を要請。地域住民と検討を重ね、跡地の利用方法や公園の内容を決定し現在に至っている。平常時は、地域の人々の憩いの場として、災害時は周辺の消防署、警察署、病院等と連携した避難拠点として大きな効果が期待されている。

桃井原っぱ公園の北側に存在する荻窪病院は、昭和8(1933)年中島飛行機東京工場が年々増加する従業員の健康管理を目的に工場内に医務室として開設したのが始まり。昭和11(1936)年に病院建物本館が完成し中島飛行機付属病院に改称、昭和21(1946)年荻窪病院として開設。現在、東京都災害拠点病院としての取り組みも活発に行っている。荻窪病院の基本理念は「安心で信頼される医療を提供するために」。中島飛行機は、医療関係にもその足跡を残していた。

青梅街道の桃井三丁目交差点近くの一角に、2つの碑が立っている。一つは「ロケット発祥之地」、一つは「旧中島飛行機発動機発祥之地」と刻まれている。

#### 参考文献

- 『日本航空史 昭和前期編』 財団法人日本航空協会
- 『巨人中島知久平』 渡部一英 著
- 『富士重工業30年史』 30周年社史編纂委員会・社史編纂室
- 『中島飛行機エンジン史』 中川良一・水谷総太郎 共著
- 『「戦前」という時代』 山本夏彦 著
- 『井荻町土地区画整理の研究』 高見澤邦郎 著
- 『内田秀五郎傳』 井口泰吉、内田秀五郎翁喜寿祝賀会
- 『新修杉並区史(下巻)』 杉並区
- 『杉並区史(下巻)』 杉並区
- 小惑星探査機 はやぶさ バンフレット 宇宙航空研究開発機構広報部
- Ogikubo Hospital Guide 医療法人財団荻窪病院
- 桃井原っぱ公園のご案内 杉並区みどり公園課・杉並区北公園緑地事務所
- 医療法人財団荻窪病院看護部ホームページ
- 杉並区公式情報サイトすぎなみ学倶楽部

(執筆:佐野昭義 佐藤精知夫さん取材:野見山肇)